

文 學 雜 誌

銀 鈴

明治三十七年
十一月三日發行
(定價參錢)
(郵稅貳錢)

第 貳 號

石見邑智郡
田所村
銀 鈴 社

▲目 次

觸目語(評論).....

醉の日(短詩).....藏田二葉

遠 淺(俳句).....京都醫科大學 衣 川

結 婚(小説).....杏 朗

玉 舟(短詩).....大屋桂水

若き作者に(英文).....K 生

作 歌 談(評釋).....袖 影

微 響(短詩).....新涼會詠艸

編 輯 日(雜文).....桂水、翠漱

社 告.....

銀鈴

第貳號

觸目語

▲詩人は造るべからず、ある時代のある一隅に、天與の特性を得て生るゝあり。而して詩人が育たむ経路は自ら凡を脱し常を逸す。渠の眼には、世の同情すべき者形影連續して映せ。泣くに笑ふに總べて是哀心より發するもの、これ間一點の偽善ある無し。渠れ世に處して、遂に健闘の子にあらざるも宜ふる哉。

(M生)

▲戦争が社界に及ぼす諸般の影響は、量り知られず、人の生命を損ひ、巨億の財を費すは言はずもがな、中にも我文壇に波及せる或るものに至りては我等眞に苦々しとせざるを得ず。あゝ戦争はシタクなきもの也、好かぬもの也。

(M生)

▲原抱一庵逝く、文壇更に反響なきものゝ如し、渠の生涯の數奇に泣くもの、今に及びて言の出づるを、慘なる哉。

(H生)

▲燕處近藤常次郎氏は偉人なり、然り、少くとも吾等は氏が學界に貢献せし徳を稱揚するに於て躊躇するものに非らざ。刀圭界は固よりわが文壇に取りても寔に惜しむべき人なりし也。

(H生)

▲自ら歌人といゆるし人も怪まぬ金子薫園をぞ氣障な男はあらざるべし。氏は爲人甚だ温厚にして君子の風ありといふ、併かも其高作を拜見するに於いて、ウンザリせざるを得ず。渡邊光風老(併し實際はお若いゲナ)と共に大日本帝國唯一の歌ヨミ先生なり。

(S生)

▲今のわが新体詩界は落寞として何等の音沙汰なし、藤村、鐵幹、晚翠、泣菫、有明、醉茗の先進今何をか爲しつゝおはすらむ。この時よ當り余は一個青年能詩の士を得たり、中村星湖となす、氏や經驗未だ淺く、修養尙ほ深からざるべし、併も其詩の一篇毎に進跡を示す

ものあるに至りては、前途の造詣計り知る可からず。「夕雲」「雛祭」「藥草」より近く「三千里」の佳作あり、典雅温醇瓏々として誦すべく、句法眞に自在なり。更に大成を期するの意わらば、乞ふ先づ濫作を慎み、造次研讃を忘れざらんことを、余は期して君風姿颯爽、驍將として詩壇の一方に立つの日を待たんとす。

(S生)

▲燃ゆるべく唯、我等は許されぬ。現代の趣味徒らに俗を趁ひ、卑に流きて、いつの日如何にしてか復活の輝きは帯びあむものぞ。我徒不敏と雖も、聊さか是を勉めんかな。さいはひよ諸兄の賛助を得て成功の機を見んか、啻に我徒のみの幸榮にあらざる也。

(T生)

酔 の 日

おほらかに召されてまゐる果の身と
 蔵田 二葉
 あまきに慣れて人を怖れぬ

夕月夜なにを恨むさまよひか

御名かしこうて呼ぶに人もなき

うたはれて一人に終へん生ふと

いつはりてだに寄り來酔の日

み手どして嬉しう負ひしつみの名や

昨夜きよかりし里もねがはじ

草刈れる姥よびと染て山かげの

藤によく似一花の名問ひぬ

抱られて寝る夜の夢も候はめ
 (旅にしてよめる歌のうち)

母には遠き浪華江の秋(人に)

遠 浅

水 汲むや 旱天の霧 茄子に降る
 衣 川

閑 古 鳥 舟にて下る 知らぬ國

さすらひや 月の 柳の ふるき道

かち 渉る 川や泡吹く 日の盛る

遠 浅 に 女も來なる 夜振かな

月を 脊に 月待つ家や 山 の下

一本の 老いし柳やとてん

結婚

(上)

香 耶 戯 作

吐月峯を敲く音がしたと同時に、

「とり子や。」

ど、呼ぶ老爺の聲がする。

「とり子や。」

「へー。」

と云つて出て来たのは年は十八、鬼も笑はうといふ娘盛で。

「こゝへ来な。」

「へー。」

「へーぢやアない、此方へ寄れ。」

「何かご用で。」

「用があるから呼んだのだワイ。」

「だから来て居ます。」

「突飛だかな、お鳥や、お前も最ういゝ年頃になつたし、俺も樂に餘生を送りたい所から、色々心配して聲を取ることにした、勿論お前に異存はあるまいし……。」

「お父さん。」

「おゝ。」

「妾は嫌です。」

「はてな、男振はよし、財産はあるし。」

「厭ですよう。」

「これはしたり、お前怒つてるな、一は、

あ思ひ付の男でもあるのか。」

「お父さん、ちやんと最う出来てよ。」

「男がか。」

「わゝ。色が白くつて鼻が高くつて、思ひ遣りがあつて。」

「此奴、親をだましたな、イツの間に馬鹿を真似をえ腐つた、さあ白状しろ。」

「だつてお父さん、あの人は餘ッ程妾を可愛がつてよ。」

「奴ッ。親がゆるさぬ、思ひ切ツちまへ。」

「妾の約束は破ぶられなくつてよ。」

「馬鹿、馬鹿、俺が承知しない、さあ俺の定めた聲を貰へ。」

「おほゝゝゝ。貰はなくつてよ、死んだつ

ても。

「何だ、何だ、俺を誰だと思ふ、親だぞ。」

「妾は娘でおざいます。」

「知れたことだ、親を何と思つてやがるんだ。」

「おほ、娘を何と思つて居らッしやるの。」

「わ、馬鹿が、馬鹿が、今日から勘當するからさう思へ、さあ出て行け。」

「はい。出て行きます、左様なら。」

娘は立つて次の間へ出る、老爺は狼狽へながら、

「おどりや。」

「娘は最う居りません、他人のお鳥さん。」

すたく出て行く。

「ま、ま、お鳥さんでも、一寸、一寸

待つて呉れ——あ、子は持つもの。」

と、獨語

(未完)

▲本紙は隔月發行にして、次號は新年號とし、
▲來る一月一日を以て發布す。

玉舟 大屋桂水

星月夜しらべは競へ秋の蟲ひとり
斯蝻影のやせにし

星すむ夜紅にやふ花の下常世の幸を

神に得し我

涼しさや夕日が波の華の霧清き

玉舟美しき虹

うらぶれの子が琴の音は宵闇の

月よぶ松の吹息にも似む

TO YOUVG AUTHORS S. K.

You can not Become great authors, with every
current of worldly affairs, But yous hould
change it as a mountain changes the course of
winds. Authors styles are the faithful copies of
their minds. If you would write the lucid styles,
let there first Be lights in your own minds,
and if you would write the grand styles, you ought
to have the grand characters, therefore f you with
to Become the great authors, you must first
make your own minds grand.

作歌談

(一)

袖

影

歌を詠まんとする、初學の人の參考にもとて、書連ぬるあり。敢て大方に示さんためにあらず。近頃物騒の世の中、そんなによそこらに口尖らせん人もおはすべければとて、特にことばり書きをそむ添ははべりぬ。

さて新らしき歌試みん人達は、詩とは如何なるものなりやをわきまへ、古き家集撰集のたぐひは固より、廣く文學の上、歴史、修辭等の素養あかるべからず。斯くいへばあまり六ヶ數ものゝやうに聞こゆれど、初學のうちは色々には等を修むる傍はら、絶わざ古きを温ね、新しき思潮にも觸れつゝ、惡しからば惡しきがまゝに詠み出で、幾度も補削訂正せんことを要す。一氣呵成なごゝは云へ、推敲は輕んずべからざるものぞ、漢語歐語を用ゐ若くは朦朧なる体を學びて新派と心得あへ間違あり。さりながら、厘か三十一字のうちに、彼の散文にも優らん効果を收斂んとするものなきば、出來得るだけ語句の節約をなし、枕詞などの如き無意味よして興味索然たるものは必らず避くべきもの也。歌には限らざれ

ご總べて文藝の作物は、新らしきをこそ貴べ、陳きものゝ鸚鵡返しは何等の興なきものなれば、力めて人の到らぬ微を穿ち粹を抜かざる可らず、月は悲しきものゝやう能く聯想の材となれど、餘り繰返しなば、却りて嘔吐の種ともなりあむ。新作の歌よく味ひて、折柄の傾向風調を究めあべ益する所多かるべし、余は次號より詳しく新派和歌の評釋及び詩歌研究の材料となるべきものも記すべし。

此の文わざと古体に擬したるは、聊さの思ふよしありてあり。そは事のついでもて發表するの折あらん。

豫	一紙員の増加 一懸賞募集の擧 一批評欄開始
告	一寫真版挿入 一雜報欄新設

微

響

(新涼會詠草)

この思ひさあらぬさまによそはひて
山下あき子(石見)

笑とて門出の人おくる今朝

秘めおきし理想たもひのやのほ地に生たひて

咲けるか菊の成りしよそやひ

○ 田邊 馬笑(石見)

山男山にし入れやまおとこば山幸と木きれ間

くぐりて得し茸しづかな

○ 河野 素陽(濱田)

せせらぎのちひさき音のひとつにも

美し歌はこもりなむもの

○ 前田 木風(伯耆)

朝月になにの怒りぞむを獅子の

くるひ出でつる緋牡丹の花

天つちに星地つちには花の靈あれど我が歌

いかに神うごかさぬ

○ ちか かり(石見)

さらばよと城が名よびてわが泣けば

よわしと笑みて山はゆるがぬ

(城山にわか
るるとて)

○ 中村 秋泉(神戸)

草花ほのほの火焰ほのほと燃ゆる靄もの野をかづき

ゆるうも漂ふ今か

○ 増野 紫星(石見)

春のうとにわかき舟人帆をあげぬ

お、浪風の路たひらなれ

○ 山本 明星(出雲)

詩にたかきミユーズの神の使なる君

がみ袖に掩はれば足る (翠激の君に)

○ 河野 翠激

雲しづか山幽にして鳥啼かぞ

秋さゝわたる風をこそ問へ

寝ころびて呼べば雲より木精こだまして

山に相倚るわづの懐か

▲前號「紫英」中「花の香は」の歌は入澤涼川君の作
なりしを校正の際誤りて大屋無價珍君の作とし
たり、之を正す。

▲前號募集の短歌題「袖」は都合により次號に發表
すべし。十二月五日までに應募の分を加へ載せ
む。

編輯日

本紙編輯の當日——十月九日、窓の朝日に、失敗の
たと床をはね除け、食事もそこそこ、下駄突ッかけ
て小走りの一里。朝寝坊の翠激も、今朝こそはと胸

おどらせて来て見れば、いやはや、澄ましたもの。
朝風子は未だ。

いつも定刻に來たことの無い僕、今日も一時半の遅刻であつたが、まだ始まつて居なかつたので胸撫で下ろした。暫くして。テツキ振り／＼朝風子が來た、さア人數がそろつたといふので編輯にあるつた。

(以上、桂水)

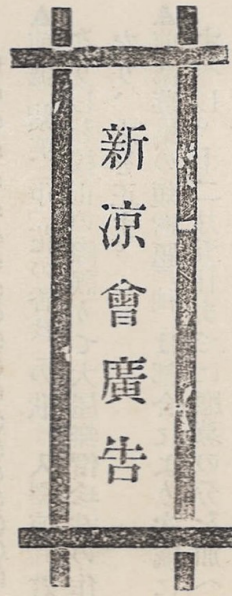
集まつた原稿を順次桂水朝風に廻す。「まづいなア」若くは「佳いぢア」を繰り返して、取捨宜しくありて、さてお互に何か書あうと云ふ。見ると室内は煙草の烟で白朦々。

各々筆を執つて、シツと考へ込む。併して覽の通り、諸君を驚かすものも出來あつた。この時朝風子傍らより「おい／＼長く書くともう餘白がぢいせ。」呵々大笑して冷語を放つ、僕及び桂水苦笑この稿を終る。
(以上翠激)

社 告

●本號は尙紙數を増加し材料をも精選すべき計畫の所、諸般不整頓の折柄亦不全完ある躰裁に終りたり。次號は來む新春第一日を以つて社中同人等大肌拔の勉強にて、外形内容の上へ新意匠を加へ大家の寄稿及び寫眞版をも

掲ぐべし。次號の材料として詩歌小説美文評論俳句其他十二月五日までに寄稿せられたれし、半紙半面十行二十字詰の事。
●本誌前號の代價未納の諸君は此際本號分と相併せ急々御送附を乞ふ、特に懇續す。



新涼會廣告

會友募集

本會は短歌の研究創作に従ひ、この主旨を賛める會友を募集す。會友は毎年壹圓の會費を納むる事但し分納を許す。會友には「銀鈴」無代配附すべし。會友の短歌ハ「銀鈴」に掲載し隨時單行詩集を發行し頒布す。本會は河野翠激之を主幹とす。
銀鈴社内 新涼會

明治三十七年十月廿五日印刷
明治三十七年十一月三日發行

(本誌一冊代價參錢) 郵税 貳錢ツ

島根縣邑智郡田所村大字下田所七百三十二番地 編輯兼發行人 河野 岩 雄
島根縣松江分八百二番屋敷 印刷 人 鶴 見 儀 市
島根縣邑智郡田所村大字下田所 發行 所 銀 鈴 社